

かけがえのない命

小野中学校 一年 先崎 愛実

私は、四人兄弟の三番目。

上に兄が二人と下に十歳離れた妹がいます。私はずっと末っ子で、妹ができるなんて思ってもみませんでした。小学四年生のある日、両親に、

「あみちゃん、お姉ちゃんになるんだよ！妹か弟ができるんだよ。」

と言われたときには、驚きと嬉しさがいっぺんに訪れて、なんだか不思議な気持ちになりました。その日から、毎日母の体の変化を目の当たりにすることができました。赤ちゃんが産まれるまでの十か月もの間、母は家事をこなしながら、赤ちゃんと栄養が十分にいくように食事にも気を付けていました。そして、日に

日に大きくなる体と向き合

いながら、私達三人のこともきちんと関わってくれていたのです。ちょうど一番上の兄が高校受験のときだったので、精神的にも肉体的にも相当大変だったはずなのに、いつもと変わらず笑顔でいた母の強さは、私もそばにいて頼もしく感謝の気持ちでいっぱいでした。

三月七日。兄の高校受験の前日の日、陣痛が来て母は病院へ行きました。真夜中の出来事だったので、私は緊張・心配・期待とが交差して時間が経つのがとてもゆっくりに感じました。七日の朝早く、無事に妹が産まれたと連絡を受け、兄達と病院に向かいました。

妹との初めての対面。とっても小さな手、小さい体、産まれてきてくれてありがとうと心から思いました。同時に、嬉しさと安心感が胸がいっぱいになり、涙があふれてきました。こんなに小さな命が母の体の中で頑張っていたんだと思うと、命が母の体の中に宿ってから誕生するまでの十か月間というのは、本当にいろいろな奇跡が重なって起こっているんだと改めて思いました。

その後、四人目の出産を終えた頼もしい母が、妊娠してから妹の誕生まで初めての出産以上に不安だったと私に話してくれたのです。実は、私が産まれたときは大変だったので無事に産まれてきてくれるのか、大丈夫だろうか心配の方が大きかったようです。

私が産まれるとき、母のお腹に入って三か月にならないくらいで出血してしまいました。医者にも「もって三日ですね。」と言われたそうです。もう赤ちゃんはだめなんだと辛い気持ち

で、母は毎日病院のベッドで泣いていたところ、心音だけが四日目、五日目と小さい音だけ確認でき、それだけが心の支えだったと言っていました。父と母は、このままで産んでも障害が残るかもしれない状況の中、産むか産まないかという命の選択を迫られました。もって三日と言われた命が、一か月、二か月と心音だけでも一生懸命頑張って生きていてくれる。その命を絶つことは絶対したくないと、不安のある中でも、両親は命がある限り産むことを選択しました。それから出産までの七か月間は、長い入院で兄たちと離れての生活、そして産むと決めたことが本当に赤ちゃんにとって良い決断だったのかと迷い、毎日が不安との戦いだったそうです。三日もたないと言われた命が無事出産の日を迎えられたことは、本当に奇跡だと母も言っていました。さらに産まれた私は、心配された障害が何一つなく五体満足だったという奇跡。担当した医者や看護婦、

家族皆がその奇跡に感謝と感動で忘れられない日となったと教えてくれました。生命の誕生とは、関わった人の思いやいろいろな偶然が重なり奇跡が生まれるということなのだ、私は母の話聞いて思いました。命があること、そして生きていくことは、当たり前のようである。当たり前ではないということ、妹が誕生したことや私が産まれたことの話から感じました。両親が守ってくれたかけがえのない小さな命。私の体の中で温かい命が今日も一生懸命息づいています。だから私はこのかけがえのない命を大切に、未来へつないでいきたいです。